

満州開拓団

1. 富士山西麓開拓

おおしもじょうむら

大下條村(現在の阿南町)

分村移民方式 地元では不毛地と云われ見向きもされない地域である。入植者は「いまに開拓をあきらめるだろう」とみられていた。開拓民は「来たり者」(新参者)扱いであった。村入り(儀礼や手続き)、祭祀への参加や共有財産の利用など村人と差別された。猪之頭^{しょうしや}廠舎を解体 払下げして猪之頭中学校建設用資材へ。

七地区(一の竹、東、見返、人穴、芝山、麓、猪之頭、長野開拓団)

入植者と地元民との軋轢が度々起こっていた。

2. 長野県

長野から満州へ昭和 7 年以来 約 33700 (一般 26332、義勇軍 6942、その他 467) / 全国 27 万人(12%) (飯島町誌下巻 p287)

開拓団 31264 人、義勇軍 6595 人 計 37859 人 108 の開拓団(長野) (林茂伸著「住民と自治」2018. 8)

【一位: 下伊那・飯田 8389 人(25. 4%) 二位: 諏訪・岡谷 2975(9. 0) 三位: 東筑・松本 2918(8. 8) 四位: 南佐久 2681(8. 1) 五位: 上伊那 2615(7. 9)】

上・下伊那郡(伊那谷地区)は全県の 1/3 を占める。(「満蒙開拓平和記念館」→「満蒙開拓団と伊那谷」)

長野県では全送出団員約 3 万余人の内 辛うじて帰国できた者 1 万 5 千人(44%)、殉難者 1 万 5 千人、未帰還者多数であった。全国の死者 37%、帰国者 62%に比して、いかに犠牲が大きかったかが分かる。(飯島町誌下巻 p288)

1930 年昭和恐慌 蚕糸業中心の長野 長野が分村移民を発案

当時長野養蚕農家は農家の 40%

「伊那谷の狭くやせた土地」恐慌、凶作が人人を追い詰め、子どもの身売りもあった。

上伊那郡町村長会が分郷計画を立てた。

昭和恐慌は養蚕業中心の長野県の経済に大打撃を与え農家一戸あたり数百

万円の負債をかかえたため、「農村経済更生運動」が起き満州開拓団へと繋がっていった。「長野県満州分村実施計画」

3. 伊南郷開拓団

興安省阿榮^{あろんきびょうてい}苗地(浜州線ジャラントラ駅から 80km、チチハルから 160km) 阿榮苗管内 2300 人 9 個の開拓団 伊南郷(送出数 1196 人 西春近、宮田村、赤穂、飯島、七久保、上片桐、片桐、南向、中沢、伊那村 10ヶ町村 分郷開拓団) 南向村からは出ていない模様。伊南郷開拓団建設組合がつくられ(昭和 17 年 2 月発足)、団員数の割り当てもされて各町村は募集に努力した。終戦の時には、成人男子の姿はなく、老人婦女子 100 名足らずだった。伊南郷は僻遠の地のために敗戦の確かな情報の入るのが遅く、現地暴民の徹底的な略奪襲撃を受けた。

4. 第六次南五道崗^{ごとうかん}長野村開拓団

牡丹江省密山^{みつざん}五道崗^{けいせい}(黒竜江省鶏西市密山市) 上伊那より 284 人、南向村より 152 人入植 引揚者 36 人(24%)、引揚げ率：長野県 45% 全国 62% シベリア 90% ハルビンから 530km、牡丹江から 250km、東安から 26km

【避難ルート】

牡丹江(1ヶ月)⇒ハルビン⇒新京⇒奉天⇒葫蘆島(葫芦島)⇒博多
東安駅には行っていない模様

東安駅爆破事件 30 両の最終列車に黒咀子開拓団(石川県)の避難民 880 人が乗っていた。東安には東安適正訓練所、関東軍第 5 軍司令部があった。

5. その他

▼無蓋貨車^{むがい}に乗せられ新京まで辿り着く。

▼汽車に乗り遅れて徒歩でハルビンの収容所まで辿り着く。ハルビンのトキワ百貨店の軒下に避難民がうずくまっていた。着のみ着のまま、真っ黒い顔でやせこけて子どもはいなかった。

▼現地残留を決めたものの襲撃やソ連兵の暴行により集団自決。

▼昭和 20 年 8/9 ソ連満州侵攻ルート(①ハイラル、②牡丹江、③ハルビン)

8/14 葛根廟^{かつこんびょう}事件

8/15 終戦日

▼8/19 午前5時関東軍司令官より「開拓団は現場を維持せよ」という命令電報が入る(富貴原郷開拓団 箕輪町)

▼8/20 伊南郷開拓団へ集結することとなり伊南郷開拓団へ応援を要請した。

▼^{たいへいこう}太平溝富貴原郷開拓団(伊南郷と同じ興安省阿榮に入植 東に天草開拓団、南西に大阪・北海道、北西に伊南、北に高北)

▼阿智郷開拓団(東安省宝清 昭和20年5月渡満 団員190人 100人死亡 帰国47人 7割死亡)

▼世界恐慌 昭和5年

満州事変 6

満州開拓団 7～

坂戸橋竣工 8

日中戦争 12 南向村より946人出征

▼引揚者(%)

- ・南向村開拓団(長野村) 24%
- ・長野県開拓団 45%
- ・全国開拓団 62%
- ・モンゴル日本人捕虜 87%
- ・シベリア日本人捕虜 90%

(川端紅葉著 20230526)

「葛根廟」→「葛根廟付近の戦闘(興安南省)」→「満州里～海拉尔撤退間の戦闘(興安北省)」

番号	邦人概況表		整理担任(末部オズ)
名称	満州里～海拉尔撤退間の戦闘		1. 満州里部隊軍人、軍属の家族 2. 満州里満鉄社員及び同家族 3. 満州国日兵官達及び同家族 4. 満州里鉄路警備隊(満軍)日兵軍官及び同家族 5. 其の他同地在住一般邦人 計約1,000名(内死亡者約500名)
時期	昭20.8.9～昭20.8.31		
場所	興安北省 満州里～海拉尔間		
事件の概要	1. 満州里守備のオ119師団司令部(向地視察隊)及び残存586大隊の一部は、昭20.8.9両戦と共に優勢なソ軍の攻勢を受け通遼に撤退したが、其の殆どは満州里～海拉尔間において戦死した。 2. 満州里在住一般邦人は、119師団司令部向地視察隊長の指示により直接戦闘に参加した者及び軍と共に撤退した者等があった。 3. 死亡者は、満州里附近において約700名、撤退中約200名が、満州里で捕えられた者約500名で撤退に成功した者は僅少であった。 4. 満州里で捕えられた者の内婦女及び老弱者は、終戦後哈尔滨、奉天方面に移送されたが、男子約200名は8/11～8/13の間にソ連「マチエフスカヤ」に送られ、昭20.11、海拉尔に並送、同地において一部は、軍の作業大隊に編入、入所し、其の他の者は哈尔滨、奉天方面に送られた。		
邦人(○)として調査担任(依頼)とする要否	資料区分	担(任)部隊	担任官署名
	1. 同戦時満州里にいた事が確実で、脱出又は捕虜となつた資料のない者。	担	119B 4A 119師団 末部
	2. 脱出資料はあるが、海拉尔に到着しない者	担	
	3. 脱出後海拉尔附近に到着したが、同地の陣地に入らなかつたもので其後の資料のないもの。	依	
	4. 海拉尔に到着し同地の陣地に確実に入つた者で、其後脱出の資料のないもの。	担	80BS 4A 旅団80旅団 末部
	5. 「マチエフスカヤ」からの並送者で、海拉尔兵懸隊に確実に到着したが、其後他に移送された資料のないもの。	担	
備考	1. 戦闘参加概況表(4201)参照		

0291

「アジア歴史資料センター」(C15010452800)

0304

番号	42		邦人(戦)概況表		整理担任(未部第2課)
名称	葛根廟附近の戦い		関係 地区 又は 地縁	1. 満洲国日系国境警察官	
時期	昭 20・8・14			2. 満洲国日系官吏	
場所	興寧南省	西科前旗 葛根廟		3. その他王爺廟在住一般邦人	
事件の概要	1. 王爺廟(興安街)の一般邦人約1,200名は、旗参事官兼国境警察隊長 浅野良三の指揮を受け、昭 20・8・11、王爺廟を出発し、白城子方向に避難行動中、14日葛根廟においてソ軍戦車の襲撃を受け交戦し、約1,000名が死傷または自決した。				
邦人(戦)として調査担任(依頼)とする範囲	資 料 区 分		担(依)区分	担(依)部隊	担任官公署
	1. 浅野良三の指揮に入つて出発したことが確実であり、戦場脱出の資料のないもの。		担	107D 44A 107師団	未部
	2. 開戦時王爺廟に在住していたことが確実であり、その後の消息不明のもの。		依		
摘要					

「アジア歴史資料センター」(C15010454100)